

2026(第28回)全国中高等学生日本語学力競試大会

<2次大会（スピーチコンテスト）発表原稿>

高等部13名 / 中等部10名

社団法人 韓日協会

心は、ちゃんと届いてますか？

김규민 (キム・ギョミン)

こんにちは。舞龍高校1年生のキム・ギョミンと申します。

私たちは、いつでもつながっています。でも、時々とても孤独です。

今、SNSは多くの人にとって当たり前の存在です。遠くにいる友達や海外の人とも、簡単につながることができます。私も中学生の頃、ある言語交換アプリを通じて、日本人の友達ことができました。毎日メッセージや通話をしながら、少しずつ距離を縮め、お互いの言語を学ぶことができました。

しかし、そんな関係の中で、私は大切なことに気づきました。それは、「言葉があっても、気持ちは必ずしも伝わるわけではない」ということです。

ある日、友達から相談を受けました。友達とけんかをしてしまい、どうすれば仲直りできるか、という内容でした。私は「まずは謝ったらどう？」とアドバイスしました。すると、友達の返信はだんだん遅くなり、短くなってきました。私は「どうして？」と戸惑い、少し傷ついた気持ちになりました。思い切って理由を聞いてみると、友達からこう返事が来ました。「もしかして、私のことめんどくさいと思ってる？」そのとき、私ははっとしました。私の短い返信が、冷たい気持ちとして伝わっていたのです。そして私も、友達の態度を「冷たい」と誤解していました。この経験から、私は気づきました。SNSでは言葉だけでやり取りをするため、気持ちが正しく伝わらず、簡単に誤解が生まれてしまうということに。また、顔が見えない環境では、表情や声のトーンが分かりません。そのため、同じ言葉でも、実際より冷たく感じてしまうことがあります。だからこそ、SNSを使うときには、相手の立場になって考えることが大切です。そして、もし気持ちがうまく伝わらないと感じたときは、一人で抱え込まず、周りの人に相談することも必要だと思います。さらに私は、SNSについてもう一つ感じていることがあります。それは、多くの人とつながれる一方で、孤独を感じてしまうことがある、ということです。画面の中ではつながっているのに、本当の意味で気持ちが通じていない。そんな経験をしたことがある人も、少なくないのではないのでしょうか。

では、私たちはSNSとどのように向き合えばよいのでしょうか。私は、「つながる」とことと「分かり合う」とことは違うと思います。本当のコミュニケーションとは、ただ言葉を交わすことではなく、相手を理解しようとする姿勢そのものではないのでしょうか。だから私は、簡単につながれる時代だからこそ、一つ一つの言葉を大切にし、相手としっかり向き合っていきたいと思います。SNSは、世界中の人とつながることができる特別なものです。しかし、本当に大切なのは、その向こうにいる「人」を思いやる気持ちです。

SNSに振り回されるのではなく、自分で使い方を考えながら、より良いコミュニケーションを築いていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

時を待つ心得

김봄 (キム・ボム)

皆さんは声優という職業についてご存知ですか？声優とはアニメーション、映画、ドラマ、ナレーションなどで声を使って演技する「声の俳優」です。近年はパソコンやスマホゲームのキャラクターを演じたり、舞台や歌、タレントとしての仕事も任せられるようになり、活躍の幅が広がりつつある職業です。私は今回アニメーション業界で声優の仕事をしている下野紘さんについて話したいと思います。

下野さんは2002年から声優をやっている、いわばベテラン声優です。出演作品をすこし紹介しますと、鬼滅の刃で我妻善逸の声、進撃の巨人でコニスプリングーの声を担当しました。下野さんは中学時代、とあるアニメーションを見て声優を目指すことになり、2000年に声優としてデビューしました。しかしデビュー当時は仕事が全く入らなかったそうです。2年という長い間オーディションを落ち続けた下野さんは自分には声優としての才能がないとまで考えるようになりました。その中、これが最後だという気持ちで受けたオーディションに受かり、2002年に初めてアニメーションの主演をすることになりました。その後どんどん仕事が増えて、第15回声優アワードでMVS賞を受賞するなど、今や世界的に有名なベテラン声優になりました。

下野さんはデビュー当時に仕事がほとんどなく、声優の夢を諦めかけていましたが、自分の道を捨てずに今の場所まで登りました。今に至るまで何回の失敗があったのでしょうか。多分私が想像する以上のチャレンジと失敗があったはずですが、それを乗り越えたからこそ今の下野さんが存在するとも言えるでしょう。私は下野さんを見て考えました。「人には皆それぞれの‘時’がある」と。私は高校3年生になりどうしても進路を決めなければならない状態になりました。多分12年の学校生活の中で最も悩み、忙しい時期だと思います。この先を見ることは出来ません。私が選択した事が正解だとも言い切れません。しかしここで止まってしまったら私に‘時’は来ないと思います。ここで大事だと思ったのがその‘時’を待つ心得です。焦る必要はありません。他人と自分を比べたが最後、不安になるだけです。結果がすぐに出ないからと言ってその時間が無意味になることはありません。むしろ次のステップの踏み台になり未来の自分に役立つはずですが。今はただ失敗に恐れず日々を努力する心得で自分に与えられたことに精一杯挑みたいと思います。下野さんがそうしたように。

今やっていることがすごく辛くて‘私はいつ報われるの？’って思う人が居るかもしれません。でもその瞬間で辞めてしまうより、今上手いかなくても諦めずに最後までチャレンジしてみてください。その先には夢に一步近づいた自分がいるはずです。

壁の向こうにあるもの

김태린 (キム・テリン)

皆さん、突然ですが、聞いてください。

「シーっ。ちょっと声が大きいよ。」

電車に乗った時、友達は唇に人差し指を付けて言いました。私はただ、友達に話しかけただけでした。でも、その瞬間、車内の静寂が、まるで壁のように私に迫ってきました。ああ、ここ韓国じゃなかった。

皆さん、こんにちは。私はケジョン高校2年生のキム・テリンと申します。今日は、その「壁」の話をしたいと思います。

日本と韓国。地図で見れば、すぐそこにある隣の国です。でも私は、言葉よりも深いところに、もう一つの「言語」が存在することを知りました。それは、文化という言語です。

電車の中での出来事の後、戸惑いは続きました。今度は日本の友達とカフェに行った時のことです。「これ、一緒に食べよう！」と私が言うと、友達は少し困ったような顔をして、「え、でも、それぞれ頼まない？」と言いました。

韓国には「情（ジョン）」という言葉があります。一つの皿をみんなで囲む、それが私たちにとって「仲良し」の証だったんです。だから、その言葉が、正直、少し冷たく聞こえました。

さらに、友達からのメッセージの返信はゆっくりで、プライベートな話を自分からあまりしない。最初の私は思っていました。「この子、私のことが嫌いなのかな」と。

でも、ある日、その友達から、手書きのカードをもらいました。そこにはこう書いてありました。

「テリンちゃんのペースを大切にしてくて、あまり急かしたくなかったの。」

私は、その一文で、全部わかった気がしました。

電車の静寂も、別々の注文も、ゆっくりした返信も。それは「冷たさ」じゃなかった。相手の時間、空間、気持ちを、そっと守ろうとする、日本ならではの優しさだったんです。

私が「壁」だと思っていたものは、実は「扉」でした。開け方を知らなかっただけでした。

「違う」ということは、「どちらかが間違っている」ということではありません。

韓国には韓国の、日本には日本の、長い歴史の中で育まれた「大切にしている価値」がある。そしてその違いが、私の世界を広げてくれた。それは確かです。

将来、私は日本と韓国をつなぐ仕事がしたいと思っています。そのために必要なのは、流暢な日本語だけではないと、今の私は知っています。「壁」を「扉」に変える力。つまり、違いを恐れず、その背景にある思いを想像できる心です。

違いを否定せず、理解すること。そして、その理解が、国と国、人と人をつなぐ第一歩になると、私は信じています。

ご清聴ありがとうございました。

「小さな一歩」を積み重ねる

남석형 (ナム・ソクヒョン)

皆さん、こんにちは。本日、私は皆さんと「完璧主義を捨てて、小さな一歩を踏み出す」ことの大切さについて話していきたいと思います。

皆さんは、何かを新しく始める時、「完璧にやらなければいけない」とか「大きな成果を出さなければ意味がない」と自分を追い込んでしまった事はありませんか？

多くの人が「100点じゃないと意味がない」と考えて、結局、挑戦すること自体を諦めてしまうことがよくあります。

しかし、歴史に残るような偉大な成功も、実は全て「とても小さな一歩」から始まっています。

例えば、世界中で愛されている作家達も、最初はたった一行の文章を書くことから始めました。彼らも最初から「最高の結果」を出したわけではありません。目の前にある「今日できること」を積み重ねた結果、大きな成果を成し遂げたのです。

このように、とても小さくて簡単な目標を達成することを「スモールウィン」、すなわち小さな成功と言います。

なぜ、これが大切なのでしょう。それは、小さな成功が「自分ならできる」という確信をくれるからです。大きな山を登るとき、頂上だけを見ていると、その高さに圧倒されて足が止まってしまいます。しかし、足元の一歩だけに集中すれば、いつの間にか高い場所に立っている自分に気づくはずです。

私も日本のアニメに興味を持った時、ひらがなやカタカナを覚えることに挑戦しなかったら、ただアニメが好きだけで終わっていたと思います。

しかし、小さな挑戦を積み重ねてきた結果、こうして日本語スピーチ大会という大きな場に立つことができました。

皆さん、今日という日の中に、どんな「小さな一歩」を見つけましたか？

それは、ずっと読みたかった本を1ページだけ開くことかもしれません。あるいは、誰かに丁寧な挨拶をすることかもしれません。どんな小さなことでも構いません。大切なのは、その一歩の大きさではなく、「今日、行動した」ということです。

私たちは、すぐ結果に出ないと焦ってしまいがちです。しかし、焦る必要はありません。毎日の小さな積み重ねは、目には見えなくても、確実に皆さんを成長させています。

最後になりますが、皆さんに言いたいことがあります。大きなことを成し遂げようと自分を追い込むのではなく、まずは自分に「小さな勝利」をプレゼントしてください。その積み重ねが、いつか皆さんの想像もつかないような素晴らしい未来へ連れてくれると信じています。

ご清聴ありがとうございました。

4000 人の‘いいね’より、1 人の‘居場所’を

도유경 (ド・ユギョン)

みなさん、こんにちは。鍾路産業情報学校から参りました。ドユギョンと申します。皆さんは、sns で誰かと繋がって、心から‘楽しい’‘と感じたことはありますか？今日は、sns の経験を通じて、私が気づいた‘人と人が本当の意味で繋がる方法’についてお話ししたいとおもいます。

昔から、誰かに注目され、名前を知られるような華やかな生活に憧れていました。人前に立つのが好きで、自分が特別な存在に見える瞬間に、何よりも幸せを感じていたからです。そんな中、昨年、私が興味本位で投稿した「動画」が信じられないほど流行し、私の人生は一変しました。「ゴムキルア」という名前で活動を始め、フォロワーは一気に約 4,000 人にまで膨らみました。同時に私を応援してくれるたくさんのファンもできました。初めは、まるで世界を手に入れたような気分でした。スマホの通知が鳴るたびにワクワクして、ついに夢が叶ったのだと、毎日が本当に楽しかったです。

しかし、その喜びは長くは続きませんでした。ある時を境に、数千件の「いいね」がついた画面を見ても、何も感じなくなってしまったのです。むしろ、画面を見れば見るほど、心の中が空っぽになっていくような不思議な感覚に襲われました。数千人と繋がっているはずなのに、自分はなぜこんなに冷めていくのか、理解できませんでした。

この理由を教えてくれたのが、早稲田大学の石田光規（いしだ みつのり）教授のレポートでした。教授は、スマホでたくさん繋がるほど、実は孤独感が高まるというデータを発表されています。人々は「ゴムキルア」が作った動画を消費しただけで、その奥にいる「本当の私」には興味がなかったのです。数字だけに縛られていた私は、知らず知らずのうちに「本当の自分」を見失っていました。

この経験は、私が日韓関係を見る目も変えてくれました。今、韓国と日本の若者は SNS で活発に交流していますが、昔の私のように「流行っているイメージ」だけを追いかけけているのでは、と感じたのです。「韓国人はこうだ」「日本人はああだ」という、メディアが作った決まったイメージだけを見て、お互いをわかったつもりになっています。日本の友人と話す時も、自分の本当の悩みより、「韓国人らしいキャラクター」を演じるように会話をすることが多かったのです。近くにいるように見えて、実は人間としての深い付き合いができていなかったのです。

早稲田大学の岡本健（おかもと たけし）教授のレポートには、「居場所（いばしょ）」という言葉が出てきます。これは単なる場所ではなく、「ありのままの自分を受け入れてもらえる安心感」を意味します。私はメディアというツールを、数字を競う場所ではなく、日韓の若者が本当の自分や日常を安心して見せ合える「デジタルの居場所」にしたいと考えています。

すごいことを言おうとするよりも、私が有名になりたい欲心の裏で感じていた本音を話したように、私たちの世代の「本当の顔」をメディアで表現したいです。私の動画や表現を見た誰かが、「あ、私と同じことを考えている人がいるんだ」と安心し、国境を越えて繋がることができれば、それこそが私の唯一の願いです。

4,000 人の「いいね」よりも、たった一人の日本の友人と交わす本気の会話が、日韓の未来を本当の意味で繋いでくれると信じています。ご清聴ありがとうございました。

皆さんは日本と言ったら何が一番最初に思い浮かびますか？祭、神社、現代に至ってはアニメーションなど色々ありますが、これら日本文化が日本由来ということ以外にも何の共通点があると思いますか？そこに私は自然があると思います。今回の発表では自然の日本文化への影響について語らせていただきます。

日本文化での自然の影響の例として枯山水というものがあります。枯山水は砂や岩などを使って自然風景を象徴的に表現する庭園様式です。また、文学のなかでは、龍宮や浄土といった理想郷が描かれていて、老いることがないという特徴から自然の摂理を越えようおうとする発想も見られます。

このように日本文化において自然とは欠かせないものと言えるでしょう。ところで、このような自然を学術的に探究するため、学界では自然を二つの種類に分けました。一つは自然そのものである一次的自然です。もう一つは人間の感性を含んだ二次的自然です。二次的自然は絵画、和歌などでよくあらわれます。11世紀から、都会に住み自然と接することがなくなった貴族が庭園、絵画、衣装などを通じて自然を表現しはじめ、本格的に二次的自然があらわれるようになりました。この再現された自然は人間世界と対立するものではなく、むしろその延長として自然の代用品とも言えるものでした。自然風景が描かれた屏風、自然を讃歌する俳句など、時間が経つにつれより創造性を持つようになったのです。

また、自然は日本の信仰心にも影響を及ぼしました。日本は島国であるため、地震や火山など自然災害が他国に比べて頻繁に発生しました。この自然災害の恐怖から影響を受けて作られた信仰が八百万の神です。八百万の神信仰では、この世の全てのものに神聖な力が宿ると信じました。だから昔の人々は自然災害を神の怒りだと解釈しました。神の怒りを静めるために祭を開き、供物を捧ぎ、神を祀る空間を作りながら日本の文化はより拡張されたのです。

もちろん、自然がただの恐怖の象徴だったわけではありません。自然のなかで人々は吉兆をさがし、幸せを祈りました。例えば、新年の初めての夢に出てくるものからその年の運勢を占う初夢文化があります。一富士二鷹三茄子等々自然物を通じて幸せを祈る姿が見られます。

このように自然は護符や祝儀の意味を含んでいます。自然から得られるお守りの力は変わり続ける自然の儚さを和らげるために使われました。この特徴は古代から中世、現代に至るまで文学作品のなかで重要な役割を担ってきました。こうして、自然の日本への影響は文化の拡散となって、今も変わらず日本文化の基盤として存在しています。

自然災害のように恐ろしくもある自然ですが、それを克服し豊かな文化を作り上げていく人間の姿勢こそ素晴らしいと思います。ましてや現代では科学技術で自然を乗り越えつつあります。このなかでこれからどんな文化が出来上がるのでしょうか。とても楽しみです。

大切なご縁

박윤정 (パク・ユンジョン)

こんにちは。

ボンバク高校2年生のパク・ユンジョンと申します。今日は、私が出会った大切なご縁についてお話ししたいと思います。

私は今年の3月、韓日協会が主催する「韓日青少年交流会」に参加しました。実は最初、参加をためらっていました。去年も似たような交流会に参加したのですが、人見知りの性格のせいか友達を作れなかった悲しい記憶があったからです。「また友達ができなかったらどうしよう。」という不安が、私を足止めしました。それでも、私はもう一度勇気を出して、参加してみることにしました。

交流会の初日、私はある日本人の女の子と出会いました。最初はやっぱりぎこちなかったのですが、話をしてみると、驚くほど似ているところが多くて、好きなものも一緒でした。外国人の友達とこんなに心が通じ合うのは初めてだったので、胸がとてもワクワクしました。その子と一緒にご飯を食べて、おしゃべりをして過ごすうちに、私は初めてこう思いました。「今回は、前とは違う」と。そして、私たちが本当に心を通わせたと感じたのは、二日目の弘大（ホンデ）でのことでした。公園に座って二人でチュロスを食べながら、いろいろな話をしていた時、突然その子がこう言いました。

「私の本音を言ってもいい？」

「本音」とは、建前ではない、本当の心のことです。日本人に本音を話すことがどれほど難しいかわかっている所以我は「本音を話してくれるくらい仲良くなれたんだ！」と心から嬉しくなり、私も自分の本音を話しました。その瞬間から私たちはただ交流会で出会った人ではなく、本当の「親友」になれたと思います。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、いよいよお別れの時がやってきました。その子は私に日本の名前を付けてあげると言って、「斎藤 風（さいとう なぎ）」という名前をプレゼントしてくれました。ここで「風」とは、風が止んで海が穏やかになる状態のことです。その子は、「ユンジョンと一緒にいると心が穏やかになるから、風という名前がぴったりだよ！」と言ってくれました。素敵な苗字と名前をつけてもらってすごく嬉しかったです。

その子は今でも私のことを「なぎちゃん」と呼んでくれています。

そして別れ際、私たちは強く抱き合いながらこう言いました。

「また会おうね。約束だよ！」

私はその約束を守りたくて、今日、このコンテストに挑戦しました。私にとってこの縁は、一つの約束であり、大切な目標になりました。みなさんも、かけがえのない縁の中から、自分だけの目標を見つけて進んでいってください。

ご清聴ありがとうございました。

不可能を可能にした男「中村修二」

서예나 (ソ・イエナ)

皆さん、私たちが毎日使うスマートフォンの画面や、家を照らす照明など、これらすべての光に共通する点をご存知でしょうか。それは、「青色 LED」があるからこそ可能だということです。今日は、世界中が不可能だと言ったこの「青色 LED」を作り出し、人類の夜を変えた人物、私が最も見習いたい中村修二教授のお話をしようと思います。

1980年代後半、光の三原色のうち赤色と緑色の LED はすでに存在していましたが、青色だけはまだ開発されていませんでした。当時、ほとんどの大企業や科学者は「青色 LED の開発は 20 世紀中には不可能だ」と断言していました。

しかし、中村教授は違いました。彼は地方のあまり知られていない中小企業に勤める、一人の平凡な技術者でした。予算や設備が十分ではない中で、自ら装置を改良しながら研究を続けました。また、社内でもその研究は難しいと見られ、批判的な意見もありましたが、彼は決して屈しませんでした。誰もが成功の可能性が高い物質を選ぶ中、彼は扱いが難しすぎて誰も見向きもしなかった「窒化ガリウム」を選択するという大胆さを見せました。

彼の成功の秘訣は、優れた頭脳だけではなく、「執念」そのものでした。数千回の実験が失敗に終わり、周囲から批判されても、彼は「できるまでやる」という覚悟で研究室を守り抜きました。そしてついに、世界で初めて青色 LED の開発に成功しました。この発明により、人類は効率よく多様な色を表現できる「白色 LED」を手にし、エネルギー消費の削減につながる「光の革命」が起きました。その功績により、彼は 2014 年にノーベル物理学賞を受賞しました。

私が中村教授を尊敬する理由は、単にノーベル賞を受賞したからではありません。周囲の否定的な視線や数々の失敗の中でも、「自分の信じる道を最後まで進む勇氣」を貫いたからです。

そして彼は、次のような言葉を残しました。「他人とは違うことをせよ」「非常識なアイデアを恐れるな」私も彼のように、これから難しい壁にぶつかっても簡単に諦めない人になりたいと思います。他人が行かない道であっても自分を信じて挑戦し続け、いつか自分だけの光を放てる人になりたいです。

ご清聴ありがとうございました。

無謀でもいいから、まずやってみるということ

전지민(ジョン・ジミン)

こんにちは、慶北外国語高校2年生のジョンジミンと申します。よろしくお願いします。
皆さんは、なぜ日本語を学び始めましたか？ おそらくここにいらっしゃる多くの方と同じように、私もアニメがきっかけでした。

いわゆる「中二病」真っ盛りの15歳。私はアニメのシーンを現実でやってみたいと思いました。超能力を練習したり、異世界に行く呪文を唱えたり…というのは冗談ですが、バレーボールアニメ『ハイキュー!!』を見て、「バレーをやりたい」と強く思うようになりました。しかし、当時の私はバレーのルールすら知らず、運動神経も良い方ではありませんでした。それでも「やりたい」という一心で、友達と体育の先生のところへ行き、「バレー部をつくらせてください!」と言いました。

当然最初は無理だと断られましたが、私たちは諦めませんでした。活動計画書を書き上げて再び直談判に行き、ついに先生は私たちの熱意を受け入れてくださいました。

そうしてようやく始まったバレー部でしたが、予想外の事態が起きました。

募集開始から一週間で希望者がなんと40人を超え、私までオーディションを受けることになったのです。その時は正直、「自分が作った部活なのに、落ちたらどうしよう」と、怖くて仕方ありませんでした。オーディション前日、夜まで体育館で必死に練習し、私はかろうじてバレー部に残ることができました。

それからは週末も返上で毎日練習に励み、最初で最後の大会に挑みました。

結果は、地域予選2位。

周りでは「2位でもすごいよ」と祝ってくれましたが、試合後の私は悔しくて悔しくて、涙を止めることができませんでした。今考えてみると、なぜあんなに涙が出たのでしょうか。それはただ「負けたから」じゃないんです。それは、大好きな仲間たちとの時間が終わったからです。

だから私に残ったのは「2位」という数字ではありません。

ただのアニメ好きのオタクだった私が、何かのために泥臭く、必死にしがみついた時間。

そして、その中で心から笑い、泣いた自分自身の姿です。

その時間が忘れられなくて、私は今もバレーを続けています。

皆さんに、一つ伝えたいことがあります。もし今、迷っていることがあるのなら、結果を考える前に、まずは一度やってみてほしいのです。

うまくできなくても、結果が出なくても大丈夫です。後で振り返ったとき、「ああ、やっておけばよかった」とため息をつく人より、「まさか、あんな無謀なことまでやっていたなんて!」と笑って話せる人の方が、ずっと素敵だと思うからです。

私の人生の「最初のサーブ」はバレーボールでしたが、今日、このステージで日本語で想いを伝えるこの瞬間は、私の「二度目のサーブ」です。完璧なサーブではないかもしれませんが、私の気持ちがギュッと詰まったサーブです。私のこのサーブが、皆さんの心に小さな勇気となって届きますように。

ご清聴ありがとうございました。

『翼を守る選択』

정예주 (チョン・イエジュ)

こんにちは。安養外国語高校1年生のチョン・イエジュと申します。私は中学校の国語の授業で、事前に配布された詩を読み、分析して提出するという課題をしたことがあります。その中にユハの「自動ドアの前で」という詩がありました。

詩に書かれているキーウィという鳥はニュージーランドの豊かな自然環境の中で、遠くまで餌を探しに行く必要がないため、翼が退化してしまった鳥です。この詩は、便利な環境の中で翼が退化したキーウィのように、人間も技術の便利さによって本来持っていた能力が退化してしまうのではないか、という懸念を表しています。

私はこの詩を読みながら、自分の生活を振り返りました。学校や日常で与えられる課題をこなすとき、私はいつもAIの助けを借りていたことに気づいたのです。実は最初に話したその国語の課題さえも、AIに頼っていました。数年前まではAIは広く普及していませんでした。しかし今ではAIが汎用化され、人間が本来していたことを代わりにやってくれるようになっています。私たちはもう長い文章を読んだり、分厚い本をめくって資料を探したり、絵を一枚一枚手で描く必要もありません。AIがあるからです。AIは本来なら多くの時間をかけなければならないことを、ほんの数秒でやってくれます。けれど、その便利さの裏で、人間はAIに役割を奪われ、自分自身が退化する怖れがあるのではないのでしょうか。便利さは私たちを助ける一方で、自分で何かを成し遂げる機会をも奪ってしまうのです。技術は人間の便利さを追求するために進歩すべきだという考えが大多数です。しかし私は、人間は時にはあえて不便さを選ぶべきだと思います。今のままでは、人間は技術進歩の被害者になるでしょう。もしかすると、すでに被害者になっているのかもしれない。

私自身も、学校で「あるテーマについて自分の意見を考えてきなさい」と言われると、最初から自分で考えるよりも、AIに方向性や内容を尋ねてしまいます。少し不完全でも、自分で枠組みを作り、内容を膨らませて書いていけばいいのに、それすら難しくなってしまったのです。私たちは便利さの中で、知らないうちに少しずつキーウィのように退化してきました。今この発表を聞いてくださっている皆さんも、日常でAIを多く利用していると思います。そして私のようにAIに依存し、考えることを面倒に感じるようになった方もいるでしょう。AIに任せてしまえば、とても楽です。時間も大幅に短縮されます。

それでも、AIを使う前に一度、自分で考えてみる時間を持つのはどうでしょうか。たった5分でも構いません。短い時間でも一人で悩んでみるだけで十分です。小さな努力ですが、その習慣が積み重なれば、私たちがキーウィにならないように助けてくれるでしょう。

技術は日々進歩します。大切なのは、皆さんの選択です。皆さんは便利さの中でキーウィになってしまいますか？それとも翼を守り続けますか？

ご清聴ありがとうございました。

二十歳の僕，日本で見つける新しい自分

조성훈 (チョ・ソンフン)

みなさん、こんにちは。初めまして。私はチョソンフンと申します。僕は今、ある幸せな想像をしています。二十歳になった僕が、自分の力で日本の道を颯爽と走っている姿です。

今日は、僕の人生の新しい一ページを飾る「日本バケットリスト」について、心を込めてお話しします。一つ目は、自分の手で「自由」と「責任」を掴むことです。

僕はただの観光客として日本に行きたくありません。自分でレンタカーのハンドルを握り、地図を広げ、自分の足で行きたい場所を見つけたいです。途中で見つけた静かな防波堤で釣りをし、自分で料理をして食べる。そして沖縄の澄んだ星空の下でキャンプをしながら、これからの人生についてじっくりと向き合う。誰かに決められたルートではなく、自分で道を切り拓くこの過程こそが、僕にとっての「大人」への第一歩だと思っています。二つ目は、本物の経験を通じて「世界の広さ」を知ることです。

冬には札幌の雪まつりで精巧な雪像に感動し、夏には日本の象徴である富士山に登って、その頂上から広い世界を見渡したいです。また、伝統的な歌舞伎を観てその美しさに触れたり、地元のサッカーチームに交じって言葉の壁を越えた友情を築いたりもしたいです。何が入っているかわからない「福袋」を買う時のドキドキ感や、高級な旅館でいただく美しい懐石料理の味。こうした多様な経験の一つ一つが、僕という人間をより豊かに、そして強くしてくれると信じています。最後は、僕の成長を支えてくれた家族への「感謝」を伝えることです。

僕がこうして自由に夢を描けるのは、公務員として誠実に働きながら僕たちを守ってくれる父と、国を守るために励んでいる兄・ソンユンがいてくれたからです。旅の終わりに、父に似合う格好いい服や兄が喜ぶプレゼントを選びながら、「僕、もう一人でやっていける大人になったよ。今までありがとう」と胸を張って伝えたいです。大人になるとは、単に年齢を重ねることではなく、自分の人生の主人公として歩み出すことだと思います。僕の日本旅行は、そのための大切な「独立宣言」です。二十歳の僕が日本で最高の笑顔を見せられるよう、今の高校生活も全力で頑張ります。聞いてくださって、本当にありがとうございました！

聲のかたち

한아름 (ハン・アルム)

皆さん、こんにちは。

皆さんはコミュニケーションって言ったら何が思い浮かべますか？あと、皆さんはコミュニケーションとは声があってこそ成り立つものだと思いますか？

私たちは普段、声を使って気持ちや考えを伝えています。だからこそ、無意識のうちに声があることを前提にしているのかもしれないですね。しかし、本当にそうでしょうか。

日本語にはこえを表すかんじが二つあります。私たちが普段使う声と耳などいくつかの漢字からできている聲です。

そして、二つ目の「聲」には音だけではなく、その奥にある思いまでも含まれているように感じます。

皆さんは聲の形っていう映画を知っていますか？聴覚障害を持つ少女とある少年を描いた作品ですが、多分多くの皆様が知っているだと思います。わたしは映画「聲の形」を通して、この違いに気づきました。

この作品では、声が届かない中でも、人と人は確かに思いを伝え合っていました。手の動きや表情、視線——音がなくても、それらは十分に「言葉」として機能していたのです。しかし、これは映画の中だけの話ではありません。現実にも、言葉に頼らずに思いを伝え合っている人たちがいます。そしてそこには、表情やしぐさ、視線といった、さまざまな伝え方が存在しています。そのような方法は特別なものではありません。私たちは普段、相手の表情や視線、声の大きさ、話の間の取り方などから、言葉になっていない感情を自然に受け取っています。

言葉は人と人とをつなぐための、とても便利な方法です。しかし、どれだけ言葉を重ねても本当の気持ちをうまく伝えられないことがあります。反対にだった一つの表情やしぐさに救われることもあります。

だからこそ私たちに大切なのは、「どう話すか」ではなく、「どう伝えようとするか」だと思います。相手の表情を読み取ろうとすること、小さな変化に気づこうとすること。その姿勢こそが、本当のコミュニケーションにつながるのではないのでしょうか。

コミュニケーションとは、上手に話すことではありません。相手の「聲」を受け取ろうとすることです。

これからの社会に必要なのは、便利な言葉だけではなく、多様な伝え方を受け入れる力です。声があってもなくても、誰もが思いを伝えられる社会。その実現のために、私も一歩を踏み出したいと思います。

それこそが、私が考える「コミュニケーション」です。

皆さん、突然ですが、本日この場所で様々なスピーチを聞いている皆さんの感想を心の中で思い浮かべていただけますか。もし日本語を数多く耳にしてきたがゆえに、思わず韓国語ではなく日本語で考えていたとしたら、皆さんも私と似たような経験をされたのかもしれませんが。「心の中の言葉まで日本語で考える」ということは、アニメを見たり、J-POPを聴いたりした後の私によくあることです。これは日本語を上達するのに役に立つ特別な方法でもあります。しかし、初めから今のようなことができたわけではありません。ここでアニメなどの日本文化が好きだった小学生の頃の自分について話したいと思います。ある日、母と一緒にご飯を食べていると、いつも母が見ている日本のドラマがテレビから流れてきました。テレビの画面がよく見えなかった私はドラマの音だけを聞きながらご飯を食べました。すると、とても不思議な体験をしたのです。ドラマのセリフが、なんとなく理解できて耳に入ってきました。自然と勉強を始めた私は、こう考えました。単純に読んだり書いたりするだけではなく、もっと楽しく日本語を身につける方法はないかな、と。そうした疑問が、私の学び方を変えるきっかけとなりました。あれから、言語交換アプリで日本の友達と直接話し合うことに挑戦しました。最初は緊張のあまりうまく話せない時も沢山ありました。それを通じて思ったことは、翻訳の助けを借りてまで画面越しに交わした一言が、教科書の一行より心の中に残ったということです。さらに、色々な趣味があった中学生の私は、行った本屋で日本語の原書を読もうとし、ゲームをしながら日本の方と会話しました。直接歌詞を書き、J-POPの曲も作りました。さらに、好きなアーティストのライブ配信を見ながら、「理解しよう」と意識しなくても日本語が入ってくる感覚もちゃんと覚えました。趣味まで日本語が結びつき、私の世界がより深く広がったのです。ここで最後にもう一つ。最近は考え事がある時、頭の中の言葉を日本語で整理します。ぎこちなかった思考も続けるうちに形を持ち始め、やがて自然に浮かびます。そのうち、分からない表現に出会ったらそのままにせず、使えるようになるまで調べ続けています。言葉を探しながら何度も考え直すことで、より深く何かを考えられます。日本語のセリフが聞こえたあの日から、中学生の頃から資格をとるのを目指してJLPT一級を取るまで。私は、「趣味と言語を結びつけること」、そして「心の中の言葉を日本語で考えてみること」。この二つの方法を勉強に加えて日本語と仲良くなることができました。大切なのは、自分が楽しめる形で言語と関わることです。最初の質問にもう一度戻ってみましょう。このスピーチが終わった後、皆さんはどの言語で感想を考えたいと思いましたか。もし、これをきっかけに「日本語で考えてみたい」と少しでも感じていただけたなら、その瞬間から始まるのです。日常生活に言語を取り入れたその日から、皆さんの世界が広がります。ご清聴ありがとうございました。

歌の持つ力

김나경 (キム・ナギョン)

皆さん、こんにちは。

皆さんは、歌を聴いて、心が温かくなったことがありますか？ または、歌を口ずさんでいたら、いつの間にか気持ちが軽くなっていた、そんな経験はありますか？ 私にとって歌はずっと特別なものでした。今日はそんな歌の力についてお話ししたいと思います。

私が歌の力を初めて感じたのは、幼い頃のことです。親戚が集まる場で、私は歌いながら踊ったことがあります。何歳だったか、正確には覚えていません。でも、その日の空気や、家族の顔、そしてその瞬間の温かさは今でもはっきり覚えています。難しいことは何も考えていませんでした。ただ、楽しくて、嬉しくて、体が自然と動いていました。

歌い終わった時、目の前に広がっていた光景が、今でも忘れられません。家族みんなが笑顔で私を見ていたんです。おじいちゃんも、おばあちゃんも、お父さんも、お母さんも。みんなが笑っていました。その笑顔がとても温かくて、とても嬉しくて。私は心の中で思いました。「歌ってよかった」と。その瞬間、私は気づきました。歌は、歌う自分を幸せにするだけでなく、聴いてる人も笑顔にできる。たった一つの歌が、その場にいる全員の心を繋げることができるんです。

それから、私は歌がもっと好きになりました。友達と一緒に歌った時、みんなが笑ってくれた時、好きな歌を口ずさんでいたら、隣にいた人も歌い始めた時。その度に、あの幼い頃の記憶が蘇ってきます。歌には、人と人の間にある見えない壁を、そっと溶かしてくれる力があると思います。言葉では伝えにくいこと、気持ちだけでは届かないこと。それでも、歌なら届くことがある。難しい説明も、長い言葉も要らない。ただ、歌うだけでいい。それが、歌が持つ不思議で、素晴らしい力だと思います。

考えて見れば、世界中には無数の言語があります。でも、歌は違います。メロディーは、言葉がわからなくても、心に直接響いてくる。悲しいメロディーを聴けば、自然と胸が締め付けられる。明るいメロディーを聴けば、自然と体が動き出す。それはどの国の人でも、同じだと思います。歌は、人間が持つ最も普遍的な言葉なのかもしれません。

私はこれからも歌い続けたいと思います。自分が幸せになるために。そして、その幸せを、周りの人にも分けるために。私の歌で、誰かが笑顔になってくれたら、それだけで、十分です。それだけで、歌った意味があると思います。

皆さんにも、そんな歌が一つや二つあるはずです。元気が出る歌、懐かしい歌、誰かを思い出す歌。どんな歌でもいいです。その歌が、皆さんの心を優しく支えてくれると思います。そして皆さんの笑顔が、また誰かの心を温めてくれるはずです。歌には、そんな力があると私は信じています。

ご清聴ありがとうございました。

目に見えない思いやり

김나윤(キム・ナユン)

皆さん、こんにちは。今日発表させていただく仁川ひょんそん中学校のキム・ナユンと申します。'左に曲がりますので、ご注意ください。発車いたします。急ブレーキにご注意下さい。次、止まります。'今の言葉、どこかで聞いたことありませんか？そうです。実はこれは、日本のバスの中で実際に流れる案内放送です。私はこのアナウンスを最初聞いたとき、正直に言うと、「え？ここまで言うの？」と思いました。ただ曲がるだけなのに、わざわざ知らせてくれる。発車するときも、止まる時も、丁寧に説明してくれて、なんでこんなに親切なんだろうと思いました。それははじめての私の日本旅行で、一番印象に残っていた公共交通機関での体験でした。

最近、少しずつ変わってはいるものの、降りる際、準備が遅れると、そのまま通り過ぎてしまったり、ドアが完全に閉まる前に出発したりする町のバスに乗るたび、ある程度の覚悟を必要にしている私としては、大きな衝撃でした。それで、運転手さんが優しく案内してくださる日本でのバスinという空間にいながら、ふと思いました。「あれ？私、今までバスのなかでどうしてたかな。ちゃんと人のこと考えていたかな～」と。

普段、友達とバスに乗ると、私は何も考えずに大きな声で話していました。周りに知らない人がいても、あまり気にしなくて話し合ったり、笑ったりしていました。その瞬間、過去の自分の姿が思い浮かんで少し恥ずかしくなっていました。それ以来、私は小さなことでも周りのことに気をを使うようになりました。例えば、公共の場では声を小さくしたり、周囲の人の様子を見たりする等です。たった一回のバスでの体験でしたが、それは私の行動を変える大きなきっかけになりました。

日本の文化には、このように「目に見えない思いやり」がたくさんあると思います。旅館で職員さんが、私が左利きであることを察知して、そっと箸の方向を反対側に置いてくださったり、狭い報道で人とすれ違うとき、ぶつからないように待ってくれたり。「人に迷惑をかけないこと」や「周りに気を配ること」が、とても大切にされているのではないかと思います。

私は、これからも日本の文化をもっと深く理解しながら、自分自身も周りの人を大切にできる人になりたいなと思いました。バスのアナウンスも、ただの案内ではなく、「乗っている人、全員が安心して過ごせるように！」という思いやりの表れだとつくづく感じられました。そしていつかは、私も誰かにとって「この人と一緒にいると安心できる」と思われるように頑張りたいです。

ご清聴ありがとうございました。

私と日本語の出会いのきっかけ

김유진 (キムユジン)

こんにちは私は中学2年生のキムユジンと申します。皆さんは日本語の勉強を始めたきっかけを覚えていますか？多分、アニメやドラマなどをきっかけに日本語に興味を持つようになった方々が多いと思いますが、私が日本語の勉強をするようになったきっかけは私が小さい頃家族旅行で日本に行った時、日本語専攻のお母さんが家族の代わりに日本語で自然に話しているところをみました。その姿がとてまかつよくて自分もお母さんみたいになりたいという夢ができました。お母さんに私も日本語の勉強をしてみたいんだと相談したら、お母さんは日本語の勉強をするためにはまずひらがなを覚えなきゃいけないと言われて小学2年生の時ひらがなの勉強を始めました。でも英語さえも習ったことがなかった私は外国語を覚えようとしたらとても難しくてなかなか覚えられませんでした。それで日本語はだめかなと落ち込んでたらお母さんが大丈夫、あなたならきっとできるよと応援してくれました。その一言を忘れずに小学6年生になって考え直してみたら私、早く諦めちゃったのかなと思ってもう一度気持ちを新たにして日本語の勉強をしたらひらがなとカタカナを一人で覚えることができました。お母さんはほら、できたでしょう？と言ってくれました。「あなたならきっとできるよ」その一言、小学2年生の時に軽い気持ちで言われたことだと思っていました。でもお母さんはその言葉を信じて私が6年生になるまでもその夢をずっと応援してくれていたんです。それからお母さんから日本語の塾に行ってみない？と勧められてその時から日本語の塾を通い始めました。その塾には私の担当先生の安藤先生がいました。初めての授業ですごく緊張していた私をみて安藤先生は笑顔で迎えてくれました。週に一度の授業でもまだまだな実力ながらも日本語で会話ができることがすごく楽しくてその日が来るのがいつも楽しみに、日本語を勉強する時間がどんどん好きになりました。でも難しい問題にぶつかるとうまた前のように頑張っても結局やり切れないんじゃないかなと自信をなくしてしまって不安になるたびに安藤先生は諦めないで、ユジンちゃんならできると背中を押してくれたおかげで辛いことにぶつかっても立ち上がって小学6年生の時から日本語の勉強を続けて半年後、JLPT 3級に合格できました。そして、中学1年生になって日本語大会の存在を知り、努力賞受けることができてさらにJLPT 2級にも合格できました。ここまで来れたのは周りの人たちが私の背中を支えてくれたからだと思います。お母さんと安藤先生はいつもそばで応援してくれたからこそ、ここまで成長できて、今この場に立っているのだと思います。皆さんも自分の夢を諦めずに頑張りを続けてみれば、いつかきっと自分の努力が実る瞬間が来ると思っています。皆さんの夢を心から応援しています。ご清聴頂きありがとうございました。

김재희 (キム・ジェヒ)

皆さんは、「本当の友情」とは、一体何だと思いますか？例えば、何かを買ってくれるような「好意」でしょうか。それとも、ただ毎日一緒にいる「親密さ」でしょうか。もちろん、友情の形は人それぞれです。一緒に過ごす「時間の長さ」が大切だという人もいれば、困難と一緒に乗り越えて築いた「強い信頼」こそが友情だと考える人もいるかもしれません。しかし、私はこう考えています。本当の友情とは、「理由もなく、ただそばにいてくれること」なのではないかと。ただ、理由もなく、当たり前のように一緒にいてくれること。私は、それこそが「本当の友情」だと信じています。

私には、小学6年生の時からずっと仲の良い友達がいます。その友達との出会いは、ある春の日の放課後でした。静かな教室にふわっと風が吹き込んでいた、あの日。まるで運命のように始まった縁でした。当時は、この関係がこんなに長く続くなんて、想像もしていませんでした。それから私たちは、一緒に新しい年を迎え、色々な場所へ出かけました。気がつけば、4年という月日が流れていました。些細なことで笑いが止まらなくなる日もあれば、何も言わずに、ただ静かに同じ場所に座っているだけの時間もありました。振り返ってみると、その友達には、私から離れるチャンスなんていくらでもあったはずですが、それでも、私のわがまを受け入れてくれたり、なんてことのない話をずっと聞いてくれたり。いつも当たり前のように、私の隣にいてくれました。その時、私は気づいたんです。「ああ、これが本当の友情なんだ」って。

時の流れとともに人間関係が変わっていくのは、とても自然なことです。それは決して悪いことではありません。でも、そんな中で今も私のそばにいてくれる人がいます。特別な理由があるわけではなく、ただ「なんとなく」一緒にいてくれる。私はその「なんとなく」という言葉の奥にある温かさに、何度も救われ、勇気をもらいました。その友達がいてくれるからこそ、私は今日も笑顔でいられるのだと思います。

最後にお聞きします。皆さんの大切な日常を一度、振り返ってみてください。そこに、華やかな理由なんてなくていいんです。自分がつらい時、ふと横を向けば、当たり前のようにそこにいてくれる人。今、皆さんの心の中に、そんな誰かの顔が浮かんでいますか？もしそんな人がいたら、その人こそが、皆さんにとっての「本当の友達」ではないでしょうか。そのような存在がたった一人いてくれるだけで、人は救われるのだと、私は自分の経験を通して強く感じています。本当の友情とは、理由もなくそばにいてくれること。私はこれからも、この絆を大切にしていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

文化と文化、人と人をつなぐ翻訳家

김태휘(キム・テフィ)

皆さん、こんにちは。私は日本語翻訳家になりたい中学校3年生のキム・テフィと申します。どうぞよろしくお願いいたします。皆さん、皆さんは翻訳家についてご存知ですか。多分一つの言語を他の言語に置き換える仕事だと考えている方が多いと思うのですが、私の意見は少し違います。翻訳は、文化と文化、人と人をつなぐ特別で大切なことだと思います。それでは、なぜ私が日本語翻訳家を目指すようになったのかをご説明します。一つ目は私が3年前、日本の京都へホームステイに行った時のことです。あの時私の日本語の実力はまだまだ未熟でしたが、優しく日本語を教えてくれたり、私が知らない単語を韓国語で説明してくれる日本の家族や友人たちを見て、初めて二つの言語を自由に使えることは本当に素晴らしいことで、それが誰かにとって大きな助けになることに気づきました。二つ目は、去年、韓国であった出来事です。私がソウルで旅行をしていた時、道を迷った日本人女性の方々に会いました。その時私は日本語で案内して目的地までお連れした経験があります。あの時私は言葉では表せないほど嬉しかったです。数年前に素敵だと思ったことを今では自然にできるし私の力で誰かを助けることができたことに非常に大きな喜びとやりがいを感じたからです。だから翻訳家という夢を持つようになり、この仕事がただ言葉を訳すだけではなく、文化と文化、人と人をつなぐ仕事だと感じました。しかし誰かは「最近AIが進化しているのに、翻訳家もすぐにいなくなるんじゃないの？」とか「その仕事ではあまりお金を稼げないよ」と言うかもしれません。でも私は「大丈夫だよ」と言えます。まず、翻訳は人工知能には代えられない仕事だと思います。まだ人工知能は人間の感情や文化的なニュアンスを完全に理解することが難しく、ただ言葉を他の言語に訳すだけだからです。そして私にとって経済的なことよりも、好きなことを続けながら生きていくことの方が大切だからです。そこで、私は日本語翻訳家という夢に向かって努力しています。時々大変だと感じることもありますが、それも輝く未来へ向かう一つの過程だと思って、楽しんでいきます。これからも文化と文化、人と人をつなぐ日本語翻訳家になるため一生懸命頑張っていきます。 ご清聴いただき本当にありがとうございます。キム・テフィでした。

私が尊敬する人物

배예랑 (ベ・イエラン)

こんにちは、ウルサン西女子中学校1年生のベ・イエランと申します。
本日はこんな機会をいただき、誠にありがとうございます。
皆さんは「野球選手」と聞いたとき、どんな姿を思い浮かべますか。
ホームランを打つバッターでしょうか。それとも速い球を投げるピッチャーでしょうか。
通常はどちらか一方です。
しかし、その普通を軽く破った人物がいます。
その選手こそ大谷翔平選手です。
大谷選手はピッチャーでありながら同時に、ホームランバッターでもあります。
つまり、一人が二人の役割を果たしているということです。
これは現実ではほぼ不可能だと考えられました。
なら、彼はどうやってそれを可能にしたのでしょうか。
もちろん、才能と努力もありました。
しかし、私が一番すごいと感じたのは「考え方」です。
大谷選手は高校生のとき、「マンダラチャート」という目標計画表を作りました。
その中には、「ドラフト1位になる」という目標だけでなく、「ゴミを拾う」「挨拶をしつかりする」など、野球と関係がないように見えることも書いてありました。
なぜこのようなことを書いたのでしょうか。
それは、「運も実力の一部」だと考えていたからです。
ふだんの行動が結果につながると本気で信じていました。
また、食事や睡眠、体の管理もしっかり行い、毎日の練習を続けました。
このような小さな努力が積み重なって、今の大谷選手ができたと思います。
そして、私がもう一つ学んだことがあります。
プロ野球では、ピッチャーはピッチャー、バッターはバッターという考えが普通でした。
「二刀流」は無理だと思われていました。
しかし、大谷選手は「できるかできないか」ではなく、「自分がやりたいかどうか」で選びました。
その結果、今ではメジャーリーグでも二刀流が認められ、新しい基準となっています。
ここで皆さんに質問です。
もし誰かに「それは無理だ」と言われたら、皆さんはどうしますか？
多くの人はそこで諦めるかもしれません。
しかし、大谷選手は違いました。「じゃあ、一度やってみよう」と思いました。
この小さな考え方の違いが大きな結果を生んだのだと思います。
実は、私も目標を立てても最後まで守れなかったり、途中で諦めてしまった経験があります。
しかし、大谷選手の姿を見て、ただ夢を持つだけでなく、
具体的な計画を立てて、それを最後まで実行することが大切だと気づきました。
最後に、私が一番伝えたいことを話します。
大谷翔平選手のすごさは、ホームランの数やボールの速さではありません。
「自分の可能性を自分で制限しなかった」ことです。
私たちはよく、「私は無理だと思う」「私には合わない」って自分で限界を決めてしまします。
でも、その限界を少し疑ってみたらどうでしょうか。
もしかしたら、私たちの中にもまだ見つけていない可能性があるかもしれません。
私もこれからは、自分の可能性を信じて、諦めずに挑戦し続ける人になりたいです。
皆さんも、この一歩から始めてみませんか。
ここまでお聞きいただき、ありがとうございました。

AIは機会か、それとも危機か

신민서 (シン・ミンソ)

みなさん、こんにちは。

今日は「AIは機会か、それとも危機か」というテーマで話したいと思います。

最近、AI、つまり人工知能は私たちの生活の中で急速に広がっています。

例えば、文章を書くAIや、画像を作るAI、そして翻訳をしてくれるAIなど、さまざまな分野で使われています。

私たちは毎日のようにAIの助けを受けて生活しています。

まず、AIは大きな「機会」だと思います。

なぜなら、AIは私たちの生活をとて便利にしてくれるからです。

例えば、AIを使えば短い時間で多くの情報を調べることができますし、仕事の効率も上がります。

また、医療の分野では、AIが病気を早く発見するのに役立っています。

このように、AIは私たちの生活をより良くする可能性を持っています。

しかし、一方でAIは「危機」になる可能性もあります。

その一つは、仕事の問題です。

AIが発展すると、人間の仕事が減るのではないかと心配されています。

特に、単純な作業や事務の仕事は、AIに代わられる可能性が高いと言われています。

さらに、最近問題になっているのが「ディープフェイク」です。

AIを使って、本物のような偽の動画や画像を作ることができます。

これによって、嘘の情報が広がったり、人を傷つけたりする危険があります。

私たちは、何が本当で何が嘘なのか、見分けることが難しくなっています。

では、AIは本当に危険な存在なのでしょうか。

私は、AIそのものが悪いのではなく、「使い方」が重要だと思います。

正しく使えばAIはとても便利で役に立つものですが、間違った使い方をすれば危険なものになります。

そのため、これからはAIに対するルールや教育が必要だと思います。

例えば、AIをどのように使うべきかを学ぶことや、悪用を防ぐための法律を作ることが大切です。

また、日本と韓国でもAIの利用は増えており、同じような問題に直面しています。

だからこそ、国を超えて協力することも重要だと思います。

最後に、もう一度考えたいと思います。

AIは機会か、それとも危機か。

私の考えでは、AIは「機会」でもあり「危機」でもあります。

そして、そのどちらになるかは、私たち人間にかかっていると思います。

AIを正しく使い、より良い未来を作っていくことが大切だと思います。

お聞きくださいましてありがとうございます。

日本語のおかげで、私は夢を持つようになった。

오 태웅 (オ・テウン)

こんにちは。

日本語を通して、より広い世界を夢見るようになった学生、オ・テウンです。

今日は、日本語を学ぶことで私の人生がどのように変わり、その経験がどのように私に新しい夢を与えてくれたのかについてお話ししたいと思います。

日本語を学ぶ前の私は、勉強よりも友達と遊ぶのが好きなごく普通の学生でした。

中学一年生の時、さまざまな映像やYouTubeコンテンツに出演し、多くの人と出会いました。

また、いくつかの国を訪れたことで、異なる文化への関心も自然と持つようになりました。

しかしその時まで、私は世界とつながるということを深く考えたことはありませんでした。

そんな私が日本語に興味を持つようになったきっかけは、ほとんどの友達と同じように日本のアニメでした。

「鬼滅の刃」や「呪術廻戦」などの作品を通して日本語に触れ、「領域展開」とか「雷の呼吸 壺ノ型」みたいな言葉を真似するようになりました。

そんな私の姿を見て、母に勧められ、日本語の勉強を始めることになりました。

最初は軽い気持ちでしたが、学べば学ぶほど決して簡単ではないことに気づきました。

でも、誰かにやらされる勉強ではなく、自分のために勉強するようになりました。

今年の3月、私は初めて両親を説得し、一緒に日本へ旅行に行きました。

私が初めて日本語を使える機会ができたのです。

まだ十分とは言えない実力でしたが、日本人と直接会話をし、家族のために通訳をすることができました。

また、タクシーの運転手の方に韓国を紹介する機会があり、その方が「ぜひ韓国に行ってみよう」とおっしゃってくださいました。

あの時の達成感と喜びは、今でも忘れることができません。

短い滞在でしたが、日本の文化や人々の親切さ、そして清潔な街並みに触れ、日本という国への関心はさらに深まりました。

この経験を通して、新しい文化を学ぶ喜びと、自分の国を他の人に伝えるやりがいと同時に感じるようになりました。

また、言葉は単なる知識ではなく、人と人の心をつなぐ力であるということにも気づきました。

これらの経験は、私に新しい夢を与えてくれました。

私はさまざまな言語や文化を学び、異なる国や人々を理解し、つなぐ外交官になりたいと思っています。

そして、大韓民国を世界に伝え、互いに理解し合える架け橋となる人になりたいです。

今日この場は、私の夢に一步近づく大切な機会だと考えています。

近い将来、大韓民国を代表する誇りある外交官として、再び皆さんの前に立てるよう、これからも努力していきます。

ご清聴ありがとうございました。

皆さんは一度くらい韓国人あるあるという言葉聞いたことがあるのではないのでしょうか。例えば、ソファに座るとき、韓国ではきちんと座るよりも、ソファを背もたれとして使い、床に座る人が多いです。この特徴は偶然ではなく、韓国のオンドル文化に由来していると考えられます。これから私が発表するテーマは、このような伝統文化の影響を受けた三つの現代文化です。

一つ目は年齢文化です。韓国では年齢による序列関係が非常に強いです。外国ではあまり使われない兄弟姉妹間の年齢による呼び方も厳しいです。また、韓国では初めて会ったとき、まず年齢を聞くことが多いです。これは単なる好奇心ではなく、話し方や呼び方を決めるためである場合が多いです。こうした年齢文化は話し方だけではなく、行動にも影響を与えます。年上の人が食事代を払ったり、食事の席での座席配置など、見えないルールのように適用されます。つまり、韓国において年齢とは、単なる数字ではなく、人間関係を決める言語だと言えるでしょう。

二つ目はご飯の文化です。韓国にはご飯という言葉が入った挨拶が多くあります。久しぶりに会ったときには“ご飯食べた？”とか、感謝を伝えるときには“後でご飯でも食べよう”など、多くの挨拶にご飯という言葉が含まれています。それで、なぜそれほどご飯を大切にするのだろうといえ、それは韓国において、ご飯は単なる食事ではなく、人と人をつなぐ文化だからです。韓国の伝統社会は農耕社会でした。農業は一人では難しく、村ごとに協力する必要がありました。その結果、一緒に働き、一緒に休み、一緒にご飯をたべる文化が生まれました。このようにして、ご飯は共同体の活動の一部となり現代社会にも影響を与えているのです。

最後はオンドル文化です。韓国では、先ほど話したソファの使い方だけではなく、布団を敷いて寝る生活や、家の中で靴を脱ぐ生活など、オンドルに関係する特別な文化があります。オンドルは韓国の伝統的な住居文化の一つで、床を温めて家全体を暖房する仕組みです。

現代では昔の方式はあまり使われていませんが、その構造は今も残っています。例えば、アパートの床暖房やボイラーがその代表例です。このように、オンドルはただの技術ではなく、韓国人の生活様式や空間文化を形作った重要な基盤なのです。

以上、年齢文化、ご飯文化、オンドル文化についてみてきました。これら三つの例から分かるように、私たちの日常は伝統文化と完全に切り離されたものではなく、過去の文化が形を変えて受け継がれている結果だと言えるでしょう。

これで私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございます。

気づかなかった繋がり

최 은우 (チェ・ウヌ)

こんにちは。初めましてよろしくお願いします。

まず 自己紹介からして行きたいと思います！ 私はカンウォンドから来た 中学3年生のチェウヌです。

今日私はここで語る話のテーマは ニュースや私なりの最近の出来事です。

タイトルは“気づかなかった繋がり”です。

皆さんは最近飛行機の値段が 前よりとても高くなっている事 ご存知ですか？

この前、日本に行きたくて 飛行機のチケットを調べると たった1ヶ月前は 30万ウォンくらいだった飛行機が なんと130万ウォンまで上がっていました。

とても驚いて私は すぐ理由を調べ始めました。まあ、様々な理由は色々あるだろうけどこの中での

1つの理由は 国際情勢の不安定さや それで石油が足りなくて 値段が上昇しているだと言われている

そしてその裏には 戦争や葛藤があります。では、戦争はなぜ起こるのでしょうか。色々な理由で国がお互い 平和的に合意を結ぶ意思が なかったり到達出来なかった 場合戦争は発生しますしかしその結果、

多くの人が傷ついて 苦しむ事になります。

ただ飛行機の値段が上がった だけだと思いました、戦争なんて私にとって 遠い国の話だと思ってました

でも今回の経験で考えが変わりました 実は私たちの日常にも直接 影響を与えていたのです。で、また思いました 私たちの知らない場所で起きている 出来事が実はうちの 生活と繋がっていると、

だからこそニュースやこの社会の 出来事にもっと関心を持つのが 大事だと感じます。

私たちが戦争を止める事は 出来なくてもせめて 無関心でいる事くらいは 変えられると思います。

みんなで頑張りましょう！

以上です。

ご清聴ありがとうございます。